

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770052

研究課題名(和文)シュルレアリスムの国際化における創造的変容をめぐる比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Study of Creative Changes Through the Internationalization of Surrealism

研究代表者

石井 祐子 (Ishii, Yuko)

九州大学・基幹教育院・准教授

研究者番号：60566206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、シュルレアリスムの国際化における創造的変容について、おもに日本とイギリスにおける受容の問題をめぐって比較考察を行った。研究期間中は、日英の美術館や画廊のアーカイヴで作品・資料調査を行い、同時代の展評や新聞記事、雑誌記事を丹念に検討した。アカデミックな美術史的言説のみならず、当時のコマーシャル・ギャラリーの傾向やマスメディアの言説も拾うことで、当時のシュルレアリスム受容と展開の実相を多角的に明らかにした。また、イギリスのシュルレアリスム研究者と多くの議論を行い、国際シュルレアリスム事典プロジェクトにも成果を発表した。

研究成果の概要(英文)：This research focused on the reception of surrealism and its creative changes in Japan and the United Kingdom through the internationalization of surrealism between and after the two world wars. During the period of this fellowship, the related artworks and materials such as exhibition reviews, newspaper articles and art magazines of the period were investigated at museums and galleries in Japan and the UK. Not only academic discourses of art history but also the preferences of commercial galleries and discussions by mass media of the same period were examined. By this research, the actual circumstances of the reception and development of surrealism in Japan and the UK were comparatively investigated from many different angles. As one of the results of this research, I had many discussions concerning the related topics with researchers in the UK and wrote articles for the forthcoming international encyclopedia of surrealism.

研究分野：美学・美術史

 キーワード：シュルレアリスム 受容論 比較美術史 日英のシュルレアリスム 瀧口修造 ハーバート・リード  
ローランド・ペンローズ

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究動向

シュルレアリスムとは、20世紀初頭のパリでアンドレ・ブルトンを中心とする詩人たちによって興され、美術や映画など多様な芸術の分野に拡大するとともに、国際的にも広く伝播した20世紀最大の芸術思潮のひとつである。ゆえに、その研究の裾野は広く、近年は各国でのシュルレアリスム受容についての研究も盛んとなっていた。しかしながら、従来シュルレアリスムの伝播と各国での受容の問題は、①個々の地域での受容の問題を考察する研究、②「本流」パリ・シュルレアリスムと各々の地域の二点を結ぶ研究、③複数の地域でのシュルレアリスムの活動を「シュルレアリスムの国際化」の事例として網羅的に集めるプロジェクト等が目立ち、受容する側の国あるいは地域同士が比較検討されるという視点は少なかった。中でも、日本とイギリスは国際的なシュルレアリスム運動の展開において周辺的な位置にあり、両者を比較考察する研究はほとんど存在しなかった。

### (2) これまでの研究成果と着想の経緯

研究代表者は研究開始当初まで、シュルレアリスムの美術、とくにマックス・エルンストの作品研究に従事しており、近年は、アメリカにおけるシュルレアリスム受容の問題や、芸術家の文化的移動に伴うコンテキストの転換という問題について考察し、その成果を発表してきた。また、同テーマからの展開として、イギリスで開催された国際シュルレアリスム展におけるコラージュの手法の受容と変容について検討し、2014年にはそれらの問題を包括的に論じた単著を上梓している。その前後には、とりわけイギリスのシュルレアリスムの問題について、その展開をコレクターや画廊との関わりといった観点から調査・研究を行ってきた。

そうした研究を通じて、日本とイギリスでのシュルレアリスム受容とその変容の問題には、共通した傾向があるということが浮かび上がった。たとえば、両者はシュルレアリスムを「モダン」な芸術の一潮流として、他の前衛的美術との理念的な相違を捨象しつつ受容するという傾向がある。そして、そこで特に抑圧されるのは、反芸術的理念や「伝統」との断絶、あからさまな性愛表現であると考えられる。このような受容の在り方は、日本やイギリスの芸術家や批評家たちの理解の不十分さを示すのではない。実際、両国では比較的早い時期からパリ・シュルレアリスムとの直接的交流を持ち、1930年代以降には、パリ・シュルレアリスムとは異なるかたちで（時に接近あるいは隔たりつつ）独自のシュルレアリスム的美術の動きが展開された。以上のような研究の背景と問題意識から、日本とイギリスにおけるシュルレアリスム

の受容／変容をめぐる比較考察の必要性を感じるに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、シュルレアリスムの国際化における創造的変容について、主に日本とイギリスにおける受容の問題をめぐって比較考察することを目的とする。1930年代に入り顕著となるパリ・シュルレアリスムの国際化の中で、日本とイギリスは常にそこから一定の距離を取らざるを得なかったという点において共通している。先述の通り、両者は30年代に積極的にシュルレアリスムを受容しつつも、様々な点においてパリのシュルレアリスムの理念に独自の再解釈を施しているようにみえる。そうした「創造的誤読」の内実とその後の展開を検討することによって、「受容」という営みの能動的・積極的関与のあり方と国際的文化交流の狭間で生じる軋轢それ自体の創造性を明らかにする。

本研究の具体的な着眼点は、彼らがシュルレアリスムの何を取捨選択し、どのように変容させたのだろうかということ。そして、日本とイギリスの間にはどのような類似と差異があり、それは各々の美術の展開をどのように左右しているのだろうか、という点である。

## 3. 研究の方法

本研究では、具体的研究課題として以下の(1)～(3)を設定した。また、研究計画に従い、国内外での史資料収集・調査・インタビューを行い、日英の研究者と意見交換を行った。

### (1) 両大戦間のシュルレアリスム受容における「モダン・アート」観

日本とイギリスにおけるパリ・シュルレアリスム理解と「モダン・アート」観の関係について考察する。ここでは特に、「モダン・アート」一般から「シュルレアリスム」を区別する論理がどのようなものであったのかについて、当時の一次資料とともに分析した。

### (2) シュルレアリスム受容の中で「選び取られなかったもの」が示すこと

日本とイギリスのシュルレアリスム受容において、各々が意識的・無意識的に「選び取った／取らなかった」具体的理念や視覚的表現を明らかにする。日本とイギリスの独自の展開を明らかにする際、とりわけ注目すべきなのは「選び取られたもの」よりむしろ「選び取られなかったもの」である。本課題では同時に、そうした表現が何を意味するのかを分析した。ここでは、それぞれの文化的・政治的背景の違いを念頭に置く一方で、それを超え出るイメージそれ自体の歴史人類学的側面が明らかとなった。

### (3) 受容期以降の第二次世界大戦後のシュルレアリスムの変容と展開について

主に 1930 年代に本格的な受容が始まったシュルレアリスムが、日本とイギリスでそれぞれ第二次世界大戦後にどのように受け継がれ、変容したのか、その展開を探った。両者とも、30 年代以降にあからさまな「シュルレアリスムの表現」は影をひそめるものの、それはかたちを変えて受け継がれた。各地域でのシュルレアリスム受容の創造性を明らかとするためにも、本研究では、美術の国際化が進んだ第二次世界大戦後の展開までを射程に入れた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 実地調査と資料収集

1930 年代のイギリスにおけるシュルレアリスム受容の様相を調査するため、現地での資料収集を行った。この時期のモダン・アートの展開とシュルレアリスム受容において重要な役割を果たしたメイヤー画廊（ロンドン）のアーカイヴほか、テート・アーカイヴ、テート・セント・アイヴス等で作品・一次資料の調査を行った。これらの調査では、主にメイヤー画廊、ロンドン画廊、グッゲンハイム・ジュースの活動に加え、イギリスでシュルレアリスムと関わった画家の作品等を精査した。とくに、メイヤー画廊は現在もロンドンで活動を続けており、1930 年代の活動に関する回想を当時のオーナー（フレッド・メイヤー氏）の息子であるジェイムズ・メイヤー氏から聞き取りできたことは大きな収穫であった。

また、以前より調査を続けていたスコットランド国立近代美術館アーカイヴの資料について、ロンドン国際シュルレアリスム展やシェイラ・レグ関連資料を精査した。とくに、シェイラ・レグについてはこれまでほとんど知られていなかったため、多くの未刊行資料に接することで有意義な調査となった。その他、パリのジョルジュ・ポンピドゥー国立芸術文化センター（カンディンスキー図書館）、フランス国立図書館（調査研究者用閲覧室）、パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文学図書館、ドイツ美術史研究所で収集した資料の分析・考察を行った。

日本のシュルレアリスムについては、慶應義塾大学アート・センター（KUAC）瀧口修造アーカイヴで調査を行ったほか、福沢一郎の勉強会等に参加した。

##### (2) 具体的内容

本研究ではまず、パリを中心とするシュルレアリスムの展開全体のなかで、イギリスや日本の事例を位置付ける必要があった。研究代表者がこれまで、アメリカにおけるシュルレアリスム受容の問題や、芸術家の文化的移動に伴うコンテキストの転換という問題について考察し、その成果を発表してきたこと、また、同テーマからの展開として、イギリスで開催された国際シュルレアリスム展にお

けるコラージュの手法の受容と変容について検討し、2014 年 4 月にそれらの問題を包括的に論じた単著を上梓したことは上述の通りである。（石井祐子『コラージュの彼岸：マックス・エルンストの制作と展示』ブリュッケ、2014 年 04 月。）これらの研究を足掛かりとして、シュルレアリスムの国際化とイギリス、日本での受容における問題点を整理した。

イギリスのシュルレアリスムの展開は、30 年代半ばに本格化する。本研究では、これまであまり注目されてこなかった画廊やストリートを拠点とした受容、マスメディアによる反応といった側面にも注目し、「モダン・アート」をめぐる言説との関わり等についての実像を多角的に考察した。その成果の一部は、学会発表および論文（石井祐子「その道は、長いというより広い：一九三〇年代のヨーク・ストリートにみるイギリスにおけるシュルレアリスム受容の一側面」『藝術研究』第 28 号、1-15 頁、2015 年 7 月）で発表した。ロンドン中心部、ウェスト・エンドのメイフェア地区に位置するヨーク・ストリートは、英国の代表的なアート・マーケットのひとつとして知られ、この短い街路に数多くの画廊が軒を連ねている。この街路は、歴史を 80 年ほど遡れば、英国のシュルレアリスム受容において極めて重要な役割を担った場所であった。同論文では、イギリスのシュルレアリスム受容の展開を再考し、ヨーク・ストリートに鼎立した三つの画廊—メイヤー画廊、ロンドン画廊、グッゲンハイム・ジュース—の活動との相互関係を分析するとともに、これらの画廊の歴史的な位置づけを明確にした。これらの画廊の活動と相互関係の詳細は先行研究において充分検討されてきたとは言いがたい状況であったが、本研究ではヨーク・ストリートという着眼点によって、新たな知見を国内外に示すことができた。

別の論文（石井祐子「シュルレアリスムとスペクタクル：シュルレアリスム国際展（ロンドン）の「幽霊」をめぐるノート」西洋美術研究、18 号、166-178 頁、2014 年 12 月）では、1936 年（6 月 11 日から 7 月 4 日）にロンドンのニュー・バーリントン・ギャラリーで開催されたシュルレアリスム国際展に際して撮影され、同展を特集した『シュルレアリスム国際広報』第四号（1936 年 9 月）の表紙巻頭に掲載された一枚の写真に着目し、イギリスのシュルレアリスム受容のなかで選び取られたもの、選び取られなかったものを具体的に考察した。この論考では、シュルレアリスムの「幽霊」（被写体となった女性は「性的魅力の幽霊（Phantom of Sex Appeal）」と名付けられていた）をめぐる紡がれた様々な位相の言説を比較考察し、件の写真／パフォーマンスがどのようなものとして語られているのかを確認した。次にそうした記述をもたらしした要因をシュルレアリスムの

文脈から考察する一方で、当時の新聞および雑誌記事を掘り起こすことによって、今日的言説のなかで埋もれがちな同時代的受容の論理や実相を明らかにした。

以上のような研究成果を踏まえ、研究期間後半には日本のシュルレアリスムについて検討した。本研究では、日本のシュルレアリスム研究の成果を欧米の研究とともに俯瞰することを目指し、マイケル・リチャードソン氏らイギリスのシュルレアリスム研究者と多くの意見交換や議論を行った。「アヴァンギャルド」という語の使用法の違いや、パリ、イギリス、日本のシュルレアリスムの政治性に関する比較考察、日本のシュルレアリスムにおける瀧口修造の位置付け、第二次世界大戦後のシュルレアリスムの受容と展開など、テーマは多岐にわたる。そうした議論や考察のなかで、古賀春江、福沢一郎、北脇昇、靉光、岡本太郎、北園克衛など個別具体的な画家や詩人にたいする理解や評価の違いだけでなく、「シュルレアリスム」ということばが指し示す内実や輪郭をあぶりだすための方法論の違いも明らかとなった。こうした違いを丹念に拾い、その理由や背景を考察することによって、各々の場におけるシュルレアリスムの独自性や創造的変容を比較考察した。

以上の研究成果の一部として、瀧口修造および日本のシュルレアリスムに関する論が以下の共著書に収録される予定である。Yuko Ishii, “Surrealists A-Z; Shūzō Takiguchi,” in *The International Encyclopedia of Surrealism*, Michael Richardson, Dawn Ades, Steven Harris, Krzysztof Fijalkowski, Georges Sebbag, (eds.), London: Bloomsbury, vol.3 (2017 発行予定)では、日本のシュルレアリスム受容と展開において重要な役割を果たした瀧口修造の活動について、シュルレアリスム受容期の問題意識、『近代芸術』(1938年)での議論、戦後の貢献を中心に考察した。マイケル・リチャードソン氏との共著 Yuko Ishii, Michael Richardson, “National Overviews; Japan,” in *Ibid.*, vol. 1. では、日本のシュルレアリスムの基本的概要、詩の分野、視覚芸術の分野での受容、ヨーロッパとの交流、絵画の分野での独自の展開、シュルレアリスムと写真、政治との関わり、戦後の展開について考察した。

日本のシュルレアリスム受容について、国内の先行研究の蓄積は厚く充実している。あるいは、欧米でも近年、同テーマに関する豊かな研究成果がいくつかの重要な文献や展覧会によって発表されている。しかしながら、国内の研究成果が国外で十分に共有されているとは言い難い状況であった。本研究は、イギリスの研究者との議論を通じて、両者のシュルレアリスム受容とその理解、相違を再認識することができたという意味で有意義

であった。また、それらの成果をシュルレアリスム事典という国際プロジェクトで示すという点でも、その意義は大きい。今後は、国際事典プロジェクトで作られたネットワークを基盤とし、比較考察の対象、テーマ、ジャンル、地域等を広げつつ深化させていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 石井 祐子「その道は、長いというより広い：一九三〇年代のヨーク・ストリートにみるイギリスにおけるシュルレアリスム受容の側面」『藝術研究』第28号、1-15頁、2015年7月、査読有

② 石井 祐子「シュルレアリスムとスペクタクル：シュルレアリスム国際展（ロンドン）の「幽霊」をめぐるノート」西洋美術研究、18号、166-178頁、2014年12月、査読有

[図書] (計2件)

① Yuko Ishii, “Surrealists A-Z; Shūzō Takiguchi,” and Yuko Ishii, Michael Richardson, “National Overviews; Japan,” in *The International Encyclopedia of Surrealism*, Michael Richardson, Dawn Ades, Steven Harris, Krzysztof Fijalkowski, Georges Sebbag, (eds.), London: Bloomsbury, 3 vols, 2017 発行予定 (1, 728頁)

② 石井 祐子『コラージュの彼岸：マックス・エルンストの制作と展示』ブリュッケ、2014年04月

[その他] (計2件)

① 石井 祐子、広島・長崎県美術館平和発信事業実行委員会「広島・長崎 被爆70周年 戦争と平和展」(於、広島県立美術館、長崎県美術館) 年表作成・編集、頁数なし、2015年7月

② 石井 祐子(編)「文献リストと解題(特集 スペクタクル)」『西洋美術研究』18号、198-209頁、2014年12月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石井 祐子 (ISHII, Yuko)  
九州大学・基幹教育院・准教授  
研究者番号：60566206